

2022 年度 1 1 学期終業式

皆さん、おはようございます。

4 月からスタートした 1 学期も、今日、終業式を迎え、明日から夏休みに入ります。

新型コロナウイルス感染拡大の心配は今も続いていますが、そんな中、この 7 月まで対面での授業、行事が実施できたこと、本当に有り難いことだと思っています。

1 学期を振り返ってみますと、縮小した形ではありましたが、ある程度の準備期間をもって 4 月に光塩祭を行うことができました。光塩祭に向けて準備し、活躍し成長していく皆さんの煌めく姿とはじける笑顔を拝見し、私自身心躍る時を過ごしました。

5 月には 1 家庭 1 時間のみの限られた時間ではありましたが、2019 年以來の授業参観が実施でき、皆さんの学院生活を保護者の方々と共有する時間を持つことができました。

6 月には大学でそれぞれの道を歩む卒業生が母校に帰ってきて教育実習を行いました。それぞれが目標を立てて 2 週間あるいは 3 週間の実習に臨みました。皆さんと関わり、皆さんに支えられて目標達成以上のものを受け取って実習を終了しました。

6 月末の土曜日に開催されたオープンスクールには大勢の方が来校されました。今回は初めて総務委員会を中心に企画立案から実施に至るまで、すべて皆さんによる運営で、先生たちが手伝う形をとりました。来場された多くの方々の満足した表情から皆さんの企画力と実行力に誇らしさを覚えました。

7 月はじめ、高 1・高 2 の 4 名が光塩女子学院高等科を代表してオーストラリアのブリスベンにあるルルドヒルカレッジへターム留学のため、旅立ちました。多くのことを学び吸収して 9 月に戻ってきてくれることを楽しみにしています。

7 月 16 日(土)には JR 高円寺駅開業 100 周年記念事業の一環として地元の方々によって行われたウクライナ緊急支援街頭募金に皆さんの中から 50 名を超える方が志願して参加し、募金を呼びかけてくれました。皆さんの呼びかけと協力が少しでも平和への歩みを進めるものに実ることを心から願っています。

そして、明日からいよいよ夏休み。夏休みに入りますと、補習、クラブ活動、山荘代替行事が続きます。この度は、自由登校期間を予定よりも長くして、自習室の充実を図りました。7 月と 8 月の自由登校日に自習室見守りスタッフとして 40 名以上の卒業生が協力してくださる予定です。ぜひご利用ください。

夏休みは学期中とは異なり、それぞれのご家庭での生活が中心になります。「夏季休暇中の注意事項」を確認の上、各自が判断して様々な危険を回避するようにしてください。特にスマートフォンの画面を見る時間が長くなり過ぎたり、時間を忘れて好きなことに没頭し過ぎて睡眠時間が足りない状態が続いたりして、生活リズムを崩すことのないよう留意してください。

一方で、夏休み中は、学校に縛られない広い意味での学びも進めてほしいと思います。時間がないと読めないような本の読破に挑戦する、オンラインあるいは対面でのイベントに出向いて興味ある分野をさらに掘り下げて学ぶのも良いでしょう。日頃の学院生活がある中では、忙しくてなかなかできない探究活動に各自ぜひ挑戦してみてください。

さて、夏休み中には、8月6日に広島原爆記念日、8月9日に長崎原爆記念日、8月15日に「戦没者を追悼し平和を祈念する日」いわゆる終戦記念日を迎えます。これらの記念日から私たちは何を学ぶべきでしょうか。おそらく平和の意義を知り、平和を願う心なのではないでしょうか。

今年は2月24日から始まったロシアによるウクライナ侵攻があり、今も戦闘が続き絶えず犠牲者が出ているという毎日の報道により心を痛めている方も多いと思います。心を痛めているからこそ5月に校内で行われたカリタスジャパンウクライナ支援募金に多くの方が協力してくださいましたし、先日のJR高円寺駅前での街頭募金にも協力できたのではないのでしょうか。一方で止むことのない戦禍を見聞きしていると、無力感に囚われるのは私だけではないでしょう……。

7月5日(火)朝日新聞朝刊にロシアを代表する作家ミハイル・シーシキン氏による寄稿が掲載されていました。

ミハイル・シーシキン氏は、「このごろは、ロシア人であるということに苦痛を覚える」「私にできるのは、私の国、国民、言語の名において遂行されているこの犯罪行為について、許しを請うことだけだ。」と無力感を覚えながらもこの出来事に心を痛めている想いを綴っていらっしやいます。

一方で今起こっていることの位置づけをした上で、これから向かうべき未来について文学に携わる者として次のように述べておられます。

「文学とは、戦争に抵抗するものだ。真の文学は常に、人間が憎しみではなく愛を求めていることについて語っている。」

「戦争が置き去りにした人々の間の溝を埋められるのは文化だけだ。憎しみは病気であり、文化がその治療薬なのだ。」

「真の偉大な文学であるならば、これらの本は最後には光や希望、愛に満ちたものになる。真の文学とは残酷さについて語るものではなく、人間らしさをもって残酷さを克服することについて語るものだ。私は信じたい。真の本はすべて希望や光、人のぬくもりを運ぶためのノアの箱船のようなものなのだ、と。」

私たちも憎しみではなく、愛を。争いではなく和解を。無力感に負けることなく粘り強く希望や光、人のぬくもりを運ぶ存在へと成長していけたら幸いです。微力ながらも日々、心にかけて平和を願い続けて過ごして参りましょう。